

まん            だ            ら  
曼            荼            羅            (mandala)

黛            敏            郎

古代インドでは、秘法を修める際に魔衆の侵入を防ぐため円形を画した。これを曼荼羅という。

密教用語としての曼荼羅には種々の意があるが、本来的には、諸尊が普門の大日如来を輪をなして取り巻き、大日をたすけて衆生を普門に赴かせる意味をいう。

中国及び日本では、紙帛に諸尊を図出した曼荼羅絵図のことを、一般に曼荼羅と呼んでいる。

曼荼羅では、金剛界を図出した金剛界曼荼羅と、胎蔵界を図出した胎蔵界曼荼羅の二種が代表的なものとされ、この二つを両部曼荼羅という。金剛とは、悟りの智慧の体は堅固で壊れることなく、しかもその働きはものをよく摧き破るとの意があって、金剛界曼荼羅は大日の智法身をあらわすものとされ、一方、胎蔵界曼荼羅は、大日の理法身を象徴して、衆生の本来有する因徳が、開いてそのまま果徳の蓮華と等しく、即ち菩提心の仏種を大悲万行の母胎によって育てて仏果に至らしめることを意味している。

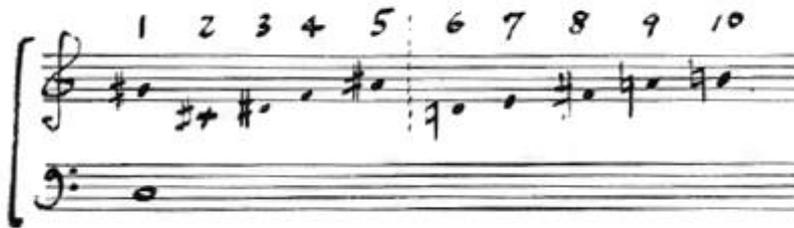
智といい理というは、仏教の二大側面を象徴する思想であって、故に、両部曼荼羅は仏教に謂うところの菩提の境地、またその境地に具備する功徳を図出したものと約言することが出来よう。

私は、いわばこの仏教の根本思想を、かつての画家たちが紙帛に描いた様に、音楽作品として描き出すことを意図した。

対象が思想という抽象的なものであるために、この音楽にあっては、一切の具体的な素材——例えば経文など——を用いずに、専ら、純粋な音響の集合体の構築によって、所期の意図を達成することを私は計画した。そのためには、多年、私の研究の対象である梵鐘のひびきが、ここでまた大きな役割を果たすことになった。私の考えるところでは、梵鐘のひびきこそ、一切の具体的要素を越えた仏教思想の象徴であり、禪に謂う不立文字ふりうもんじそのものと解されるからである。

「涅槃交響曲」の作曲中、梵鐘の部分音構成を研究しているうちに、私は非常に興味深い発見をした。数十種類の古今東西にわたる梵鐘の部分音の平均値を取ってみたところ、第一図の様な結果を生んだのである。

第一図



即ち、いくつかの梵鐘を音響分析して、仮りにそれらを或る一つの同一の基音（この場合 do<sup>4</sup>）上に、現われて来る部分音の頻度の順に並べてみると、第一図の様になるのである（この場合、部分音が第何次部分音であるかは問題でなく、専ら、同一基音上の同一部分音を対象とする）。一見して明らかな様に、最も頻度の多い、sol<sup>4</sup> から五番目の la<sup>4</sup> に至る五箇の音は陽旋法を形成し、次の六番目から十番目迄の五音は、前者と半音違いの陽旋法を形成している。我が国最古といわれる京都妙心寺の黄鐘調の鐘以来、わが鐘造り師たちが無意識のうちに探求し、また民衆が感覚的理由から最も愛着を感じた良い鐘のひびきには、二組の陽旋法に整理し得る順序の部分音が含まれていたわけなのだ。この事実、わが大和民族の音響的審美感がいかなるものであるかを如実に物語る例証の一つといえよう。

私は、この発見を貴重なものと考え、それを今度の作品の中に最初に応用してみた。即ち、第一図に示された部分音の音列はそのまま、今度の作品の第二部「胎蔵界曼荼羅」(maṇḍala garbha-dhātu) の基礎音列として使われている。第二部の冒頭に奏される合音は第二図の様な配置を取ったこの音列の垂直的提示である。

第二図



